

## 序章 哲学とイメージ

### 哲学——その分かりにくさ

哲学は分かりにくい。そのため、この学問には、どこかうさん臭さがつきまとっている。その原因の一つには、この学問に対するイメージのむすびにくさがあるのではないだろうか。カント(1724—1804)であれ、ヘーゲル(1770—1831)であれ、ハイデガー(1889—1976)であれ、その理論は高度に抽象的な言葉によって語られている。それらの言葉は、たしかにどれをとってもなじみにくい。抽象的なものであるほど、言葉はそれだけイメージ化が困難なものになり、理解のいとぐちを見失わせる。

哲学を分かりにくいものにしてしまった張本人は、古代ギリシアのアリストテレス(前384—322)ではなかったか、と思うことがある。たとえば、彼の『形而上学』の有名なくだりは、こんな文章で始まっている。

存在を存在として研究し、またこれに自体的に属するものどもを研究する一つの学がある。この学は、いわゆる部分的〔特殊的〕諸学のうちのいずれの一つとも同じものではない。とい

うのは、他の諸学のどの一つも、存在を存在として一般的に考察しないで、ただそのある部分を抽出し、これについてこれに付帯する屬性を研究しているだけだからである。たとえば、数学的諸学がそうである。さて、我々が原理を尋ね最高の原因を求めているからには、明らかにそれらはある自然〔實在〕の原因としてそれ自体で存在するものでなければならぬ。

〔形而上学〕第四卷 第一章

この文章は、哲学という学問の性格を、他の学問との相違を通して明らかにしようとしたものだが、この文章からなんらかのイメージを思い描くことのできる人がどれほどいるだろうか。この文章は、ただ一つのことを言おうとしている。哲学という学問は、他の学問とは違って、「存在を存在として研究する」学問である、と。しかし、「存在を存在として研究する」とは、いったいどのようなことなのか。

### もつとイメージの言葉を

ところが、これに対して、アリストテレスの師にあたるプラトン（前428/427―348/347）は、自分の哲学をもつと平明な言葉で語っている。プラトンは分かりやすい、などと言うと、プラトンを専門に研究している方々からは叱られそうだが、少なくともプラトンが語る言葉は、私たち

にはなじみやすい。プラトンの言葉は、実に豊かにイメージを喚起する。読者諸賢のなかには、プラトンの対話篇を読んで哲学に関心を持った人も多いのではないだろうか。

だが、プラトンによってかきたてられた哲学への関心や期待は、アリストテレスへと読み進むとき、とたんに打ち砕かれる。もちろん、ただ難解だというだけでその哲学者を責めるのは正しくない。未到の道であれば、楽な道でないのは仕方のないことだろう。しかし、当のアリストテレスは、『形而上学』のなかで「こんなことを言っている。

講義は相手の習性のいかんに応じてなされるべきである。というのも、人々は自分の慣れているように語られることを望むからであり、それと異なることは、親しみにくく感じられるだけでなく、不慣れであるがためにますます理解しにくく、そしてますます奇異に感じられてくるからである。なぜなら慣習は理解しやすいからである。

(同前、第二巻 第三章)

## 伝達と理解

自分の思想を世の人々に伝達しようとするのであれば、語り手は、相手になじみやすい言葉で語らなければならぬ。慣れはものごとを理解するための重要ないとぐちなのだ。たしかに、ど

んな学問でもそうだが、それを理解しようとする人自身がその思考体系に慣れる訓練をし、その努力をすることも必要である。しかし、そのためには、なんらかのきっかけがなければならぬ。そして、このとっかかりは、私たちの慣習的思考と共通の根を持つものでなければならぬ。階段を昇るのは私たち自身だが、この階段の第一歩は私たちに通じていなければならぬ。

たとえば、パンダを見たことのない人に「パンダ」という言葉の意味を説明するには、どうしたらよいだろうか。「それは白い熊に似ていて、両眼のまわりと両足には黒い模様がある動物である」と言ったとしよう。だが、「白い」「熊」「眼」「足」「黒い」「動物」などの言葉によってある明確なイメージを思い描くことのできない人に対しては、この説明はなんの役にも立たない。理解のいとぐちを与えるのは、私たちの慣れ親しんだ言葉、具象的なイメージを提供する言葉である。このイメージを通してこそ、私たちは異質な思考体系のなかにも入っていくことができるのである。

## 視覚の効用

その場合、とりわけ有効なのは、視覚的なイメージとむすびついた言葉である。アリストテレスはこうも述べている。

すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。その証拠としては、感官知覚〔感覚〕への愛好があげられる。というのも、感覚は、その効用を抜きにしても、すでに感覚することそれ自体のためにさえ愛好されるものだからである。しかし、ことにそのなかでも最も愛好されるのは、眼によるそれ〔すなわち視覚〕である。思うに我々は、ただ単に行為しようとしてだけではなく、まったく何も行為しようとしてもしていない場合にも、見ることを、いわば他のすべての感覚にまさって選び好むものである。その理由は、見るのが、他のどんな感覚よりも最もよく我々にものごとを認知させ、その種々の差異相を明らかにしてくれるからである。

（同前、第一卷 第一章）

こう述べるアリストテレスであるから、彼自身もつと私たちになじみやすい、そしてイメージを喚起する言葉を使うべきではなかったか。

たしかに彼もそのような言葉を用いていないわけではない。たとえば、いわゆる「四原因の説」などは、家の建築やその他さまざまなイメージとむすびついた仕方の説明されていて、そのためこの説はわりあいポピュラーなものになっている。しかし、そうした若干の例を別にすれば、彼が説明のために用いる言葉は、とうていイメージに富むものとは言いがたい。

これはなにもアリストテレスに限ったことではなく、おおむね哲学者という人種は、イメージを駆使することが不得手な人種である。哲学を分かりにくいものにしてしまう原因は、こんなと

ころにあるのかもしれない。

## カントの方針転換

私が残念に思うのは、近代のドイツの哲学者カントが『純粹理性批判』を執筆している間におこなった一つの方針の転換である。彼は当初、自分の思想を明瞭なものにするために、「実例やその他の具体的説明」がぜひとも必要だと考えていた。そして実際に初稿には、そうした実例や具体的説明を書き込んでいたという。しかし彼は、ただでさえ浩瀚こうかんになることが確実なこの書物（ちなみに、『純粹理性批判』の日本語訳は、文庫版で合計九〇〇ページ近くにもなる）が、さらに龐大なものになって読者に全体的な見通しを失わせ、かえって分かりにくいものになることをおそれて、結局はそれらを削除してしまった（第一版序文）。

カントのこの方針の転換がはたして正しかったのかどうかは、現に私たちに残されたこの書物そのものが物語っている。この書物は、哲学史上の重要文献の一つとされながらも、とっつきにくい難解な書物として知れわたっている。その無味乾燥な文体は、眠れない夜の睡眠薬代わりになってつげの代物である。こうもとっつきにくいのは、そこに実例や具体的な説明が乏しく（皆無ではないが）、文章にイメージがむすびつきにくいからである。

それにもかかわらず、この書物が哲学の古典として残っているのは、それがリアルな思想的内

実を含んでいるためだが、ただ彼はそれを簡潔にイメージ化する術を知らなかった。思想の内容そのものが複雑多岐にわたるために、それが困難だったという事情もあるだろう。しかしカントの思想は、もともと、実例や具体的な説明によって示すことのできる具象性と現実性をそなえたものであった。カントは——みずから認めているように、それを効果的に提示する才能を持った人であったのである。イメージを駆使することが不得手だったという点では、カントも典型的な「哲学者」であったと言えるだろう。

### フィクションとしての〈難解さ〉

哲学を分かりにくいものにしてしまう原因は、しかし私たちの側にもありそうだ。分かりやすいものは哲学ではない、という偏見——アリストテレス流に言えば「難解さを難解さとして研究する」のが哲学である、と考える偏見に、私たちはとらえられてはいないだろうか。哲学者が説明のために差し出す比喩や寓意を、なにか非哲学的なものに見なしてはいないだろうか。

このような考え方は、特に専門の研究者のうちに深く根づいているように思われる。カントの『純粋理性批判』以上に難解な、『純粋理性批判』に関する研究論文が、毎年、陸統と生産されるというのが現状なのだ。

また、哲学事典や概説書のたぐいも、(簡潔さを売りものにする以上やむを得ないことだが)

寓意や例示や比喩をあまり取り上げない。しかしこれでは、せつかく差し出された理解の鍵をみずから捨て去ってしまうようなものである。難解な概念を平易な概念に置き換えることには、どうしても限界がある。だから活字の森を探索する労力を惜しまなければ、概説書などを読むよりも、直接原典（もちろんそれは翻訳本でもかまわない）に向かったほうがよく分かる、という場合も少なくないのである。

## イメージの系譜学

私がこの本でねらったのは、さまざまな哲学者が差し出した寓意や比喩を蒐集して、哲学におけるイメージの系譜学とでもいったものを作ることである。よく知られているものもあるが、言葉の森に紛れて見過ごされてきたものもある。それらのなかから手掛かりとして役に立つものを拾い集め、古典的な哲学文献を系統だてて読み解いてみたい。これは私自身の理解のためでもある。

この作業は、ただ単に哲学の入口へと私たちを導くだけのものではない。それはまた同時に、哲学思想の核心部へと至る道にもなるはずである。

それぞれの哲学者が差し出すイメージは、それぞれの思考様式と密接にむすびついていて、その思想の原初的な深部を形づくっている。哲学事典の項目にあるような難解な術語がまず先に

哲学者の頭のなかにあつたわけではない。はじめにイメージがあり、術語による概念化はそのあとのことである。

### 術語というフィクション

カントの正統の後継者であると自認していた哲学者に、フィヒテ（1762—1814）がいる。彼はカント以上に無味乾燥な文体で自らの哲学体系を展開した哲学者であるが、そのフィヒテでさえ、次のように書いている。

私は固定的な術語をできるだけ避けようとした。——固定的な術語は、文字にこだわる人がすべての体系からその精神を奪い、体系を無味乾燥な骸骨に変える格好の手段である。私は将来、体系に手を加える場合にも、その最終的な完全な叙述に至るまで、この格率（『行動原則』を忠実に守るだろう。（中略）私たちは、ものごとのつながりから説明をおこなわなければならない。そして、個々の命題を厳密に限定するまえに、まず全体の展望を得なければならないだろう。

（『全知識学の基礎』序文）

ここで言われる「全体の展望」を「全体のイメージ」と置き換えてもよい。まずはじめになくしてはならないのはそれであり、概念や命題による説明は、そのあとのことなのである。

## イメージと表現

術語も結局のところは、説明のための一つ的手段にすぎない。えてして術語が難解なものになるのは、この概念化の限界を踏み越えて、語り得ぬものをあえて語ろうとするからなのである。

フィヒテは、固定的な術語は用いないという原則を掲げながら、しかし概念化の手続きにはこだわりの続けた。だが、思想の内奥にあるイメージを忠実に語り出すという点では、むしろ比喩や寓意のほうがすぐれていると言えないだろうか。あのアリストテレスでさえ、「形相―質料」、「可能態―現実態」といった彼の主要概念に関しては、その内実を比喩によって示さざるを得なかったのである。

一般に人はあらゆるものについてその定義を求めるべきではなくて、「場合によっては」ただ類比関係をひと目見るだけで満足すべきである。「たとえば現実態と可能態の場合には」現に建築しているものが建築できるものに対し、目覚めているものが眠っているものに対し、現に見ているものが視力をもってはいるが目を閉ざしているものに対し、ある材料から形作られ

たものがその材料に対し、完成したものが未完成なものに対して、といった類比関係を。

（『形而上学』第九卷 第六章）

こんなふうには語るかぎりでは、アリストテレスはやはりプラトンの弟子なのである。アリストテレスにもっと比喩や寓意の才能があったら、彼の哲学も、その後の西洋哲学の流れも、だいぶ違った形のものになっていたかもしれない。

### 哲学の流儀

もつとも、このような考え方に対しては、反対意見がないわけではない。その代表格は、カント、フイヒテに続いて十九世紀前半の思想界をリードした、ドイツの哲学者ヘーゲルの見解である。ヘーゲルといえば、ドイツ観念論哲学の完成者と目され、一切合切を概念的な論理の網のなかにからめとろうとして、きわめて難解な哲学体系を構築した哲学者であるが、そのヘーゲルは次のように書いている。

哲学が難解な一つの理由は、人々が抽象的に思考すること、つまり純粋な思想をしつかりつかまえてこれらのうちで動くことができないためである。これは、そもそも不慣れからにすぎ

ない。(中略) 哲学の分かりにくさのもう一つの理由は、思想や概念として意識のうちにあるものをあくまでも表象の形で思い浮かべようとする不精さにある。ある概念を理解はしたが、それによつて何を考えたらいいか分らない、というようなことが言われる。だが、概念が問題になつている場合には、概念そのもの以外の何ものをも考えるべきではない。そんなことを言う者の真意は、すでに熟知された表象への渴望にある。この意識は、表象と一緒に、自分がこれまで居心地よく立つていた堅固な地盤が取り去られたような気になるのである。

『エンチクロペデー』第三版三三

ヘーゲルは面白い哲学者である。哲学という学問一般の特徴を論じながら、自分の哲学体系の分かりにくさに対する自己弁解をそこに織り込んでゐる。しかも、その言葉は決して分かりにくいものではない。

それはさておき、ヘーゲルが言おうとしてゐるのは、こういうことである。つまり、ものごとを表象(広い意味でのイメージ)の形で知ることと、それを概念の形で知ることとは、まったく異なつてゐる。ものごとのイメージを持つだけなら「普通の意識」にもできるが、このイメージをさらに概念に変えて、イメージの意味を認識しようとするものが哲学であり、したがつて哲学には「哲学に特有の認識の仕方」(同前、四)が要求される。したがつてまた、哲学を理解するのにも——ちようど靴を作るためには靴の作り方を学ばなければならぬのと同様に——この学

問に特有の作法を学習するそれなりの努力が不可欠だというわけである。

### 概念の言葉

イメージに訴えることを退け、哲学の難解さを正当化しようとするヘーゲルのこうした考え方に、私はことさら反対しようとは思わない。ただしそれは、彼の言う「概念」の言葉が——どれほど難解なものであっても——少なくとも私たちに理解可能なものである限りでのことである。

学問の根本的な条件の一つは、公開性、言い換えれば、学習可能性にある。この条件が満たされるのなら、学習者にどれほどの労苦が課せられようと、それを非難するのはおかしな違いである。ヘーゲルの哲学は、すべてを概念の言葉で語ろうとする強い意志に貫かれている。その結果、自分の哲学がどれほど難解なものになろうとも、それこそが真理への道なのだ、といういわば開き直りのような信念が、彼の言葉の背後には覗いている。

かつては講義が分かりにくいという理由で、ハイデルベルク大学教授への道を阻まれそうになったヘーゲルであるが、この文章が書かれたのは、彼がハイデルベルク大学から好条件でベルリン大学に引き抜かれ、多くの弟子を抱えて、学者生活の頂点にのぼりつめていた頃のことである。彼の信念は、こうした境遇からくる自信に支えられたものであったのかもしれない。しかしそれはまた別の話である。

## 解読の面白さ

ただ、ここで私は、二つの点を指摘しておきたい。一つは、そのヘーゲルでも、「自然的意識」（＝普通の意識）を学問的境地へと高め上げる「はしご」をちゃんと用意しているという事実である。この「はしご」にあたるのが彼の『精神の現象学』である。この著作はまだ彼が学生生活を始めたるばかりの時期に書かれ刊行されたものであるが、その後、大御所的存在になってからも、彼はこの書物を手元におき、改訂の筆を加えている。この作業はコレラによる彼の突然の死によって、完遂されなかつた。しかし彼が終生そうした「はしご」を重要なものと考えていたことは、この事実からもよく分かる。

もっとも、この著作は、彼の他の著作と同様、決して読みやすいものとは言えない。しかしそこには——数少ないものの——理解の手掛かりになる強烈なイメージの言葉が織り込まれている。ヘーゲルを読む面白さは、こうした手掛かりをもとにしてテクストを読み解いていくとき、彼の難解な概念の言葉がにわかに意味を持つて輝いてくる、というところにあるのである。

## イメージと概念

私が指摘しておきたいと思うもう一つの点、それは、ヘーゲルの言う概念と、イメージとの関係についてである。哲学の流儀とは、ものごとをイメージの形でとらえるのではなく、それを概念の形でとらえることだ、とヘーゲルは言う。だが、注意しなければならないのは、こう語るときでも彼はイメージそのものを哲学から排除しようとしているわけでは毛頭ない、ということである。なぜなら、ものごとの概念はそのイメージと同一の内容を持つ、と彼は考えているからである。哲学とはものごとのイメージを概念の形で認識しようとするものであるが、「我々の意識の本当の内容は、思想や概念の形に翻訳されても保存される」（『エンチクロペディー』五）とヘーゲルは書いている。彼のこの言葉は、むしろイメージの根源性を語るものではないだろうか。

彼は先の引用のなかで、イメージから概念の領域に移されると、自分の立つ堅固な地盤が取り去られたような気になる普通の意識をやり玉にあげていた。しかしヘーゲルは、私たちがイメージを堅固な地盤であると考えることを非難しているわけではない。そうではなく、私たちが概念の領域に移されるとき、イメージという堅固な地盤が取り去られると考えることを批判しているのである。

こんな経験をしたことはないだろうか。あの人の言うことはたしかに理屈ではそのとおりだが、

「どうもピンとこない、と感じた経験である。それは、彼の言葉がイメージの実質を欠いているからである。だがこれは哲学の言葉ではない。ひとかどの哲学者であれば、その言葉は——それがどれほど難解なものであったとしても——具体的なイメージを内実として「保存」しているものである。

ヘーゲルの言う「保存」という契機が見落とされるとき、彼の哲学体系はなにか空中楼閣のようなものを受け取られやすい。しかしこれは誤った理解である。事実ヘーゲルの哲学体系（特にその「客観的精神」の部門）は、歴史的な視野に立った現実的な社会認識と、そこから生まれた問題関心を起点にして展開されている。そうした社会認識に素材を提供しているのは、歴史的現実に関するリアルなさまざまなイメージなのである。

### 哲学の戦い

しかし、イメージを抛り所とすることに対しては、不安が抱かれないわけではない。というのも、イメージそのものは自己の正当性を証明する手段を持ちあわせないからだ。さまざまな哲学者がそれぞれの内奥のイメージを核にして、さまざまな哲学の形を展開する。だがこのイメージそれ自体は、その哲学の正当性を根拠づけるものとはなり得ない。

自己の哲学の正当性を主張し明示しようとするれば、概念の言葉が必要になる。事実、哲学の歴

史において、自己の正当性をアピールするための数々の戦いがおこなわれてきた。そしてそれは——敵を批判し攻撃するにしても、攻撃を受けて守勢に立つにしても——いずれも概念による論証を武器として戦われた。こうしたことを考えると、哲学が拠って立つべき確実な地盤はイメージではなく、概念ではないか、と思われてくる。

だが、そうではないことは、事実が物語っている。哲学史上おこなわれた論争のなかで、はっきり白黒の決着のついたものが、一つでもあっただろうか。〈永遠不滅の真理〉が一つでもあったらどうか。

よい例が、ヘーゲルの哲学をめぐる事情である。ヘーゲルは自らの哲学体系を唯一の〈絶対的真理〉と見なし、過去の哲学説をすべてこの〈真理〉が開花し結実するための前段階と見なした。このことを示すために、彼は綿密な概念の自己武装をして、同時代の先行者であるカントを、そしてフイヒテやシェリング（1775—1854）を批判する。しかし、大々的な概念装置によって十九世紀前半の思想界を風靡したそのヘーゲルの哲学体系も、やがてはキルケゴール（1813—1855）に、またフォイエルバッハ（1804—1872）やマルクス（1818—1883）に手ひどく叩きのめされることになる。

話はまだ終わらない。その後、「カントに帰れ！」というスローガンのもとに、カント哲学を見直そうとする気運が高まるかと思えば、またそのあとではヘーゲル哲学の復興が云々される、といった具合なのである。

## 〈自己〉を求め旅へ

なぜ、哲学の戦いには最終的な決着がみられないのか。それは、それぞれの哲学の建物が概念だけでできているわけではないからである。概念の言葉を武器に相手を攻撃しても、それによって破壊されるのは概念だけである。だが概念はこの建物の外壁にすぎず、その内側には、またその基礎には、イメージが控えている。そしてこのイメージそのものはダメージを受けない。そもそもイメージは、およそ正しさなどが問題となる次元そのものを超えているからだ。だからそれはまた新しい概念の言葉をまとって蘇生し、あるいはまた別のイメージと融合した形で再登場したりするのである。

こんなふうに言うと、哲学はしょせん主観的な信仰告白にすぎないのではないか、と言われるかもしれない。哲学は芸術でも宗教でもないのだから、客観性と普遍性を持った真理を探求すべきものであって、私たちが哲学に求めるのもそのような真理なのだ、という声も聞こえてきそうである。

だが、歴史上に現れる個々の哲学説が主観的なものかどうかを問題にすることは、あまり意味のないことである。それらのほとんどは、それぞれの哲学者が普遍的・客観的な真理を追求し、その解答として提示したものである。しかし、そのいずれが本当のものなのかを判定する規準を、

私たちは持ちあわせていないのである。いずれをとるか、それは私たち一人ひとりの選択にまかされている。

とはいえ、哲学は、好みに応じて取り替えることのできるアクセサリーとは違う。この選択は、選択をおこなう者の内面世界のいかんにかかっている。だから、哲学の森を渉猟する旅は、〈自己〉を問い求める旅でもある。